The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	梶井基次郎の作品研究 : 〈心〉と〈外部〉を中心に
Author(s)	Wael., Mohamed. Orabi. Abdelmaksoud
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49098
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【23】

氏　　名	WAEL. MOHAMED. ORABI. ABDELMAKSOUD（ワーイル ムハンマド オラービ アブドエルマクスード）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２１６８６　号
学 位 授 与 年 月 日	平成 20 年３月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**梶井基次郎の作品研究－〈心〉と〈外部〉を中心に－**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　出原　隆俊 （副査） 教　授　内藤　　高　　准教授　加藤　洋介

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、〈心〉と〈外部〉を中心に構成されたと思われる、梶井基次郎の作品「冬の蠅」、「城のある町にて」、「ある崖上の感情」、「ある心の風景」に加え、生前の最後の作品の「のんきな患者」を含めた五つの作品を本論の研究対象とし、作家論的立場からの考察を徹底的に排除しようとしたものである。

第一章では、「冬の蠅」を取り上げ、「私の心」と周囲の〈空間〉を中心に論じた。先行研究では、「私」が当てもなく寒い山へと必死に歩き出す行為が、〈自殺〉の試みではないかと読まれてきたが、それは「解放」のための〈脱出〉だとする。そのような抵抗の〈原動力〉が末尾に見られる「私」の〈内〉的な葛藤に、その実行が冒頭の「この冬私の部屋に棲んでゐた」〈冬の蠅〉から「一篇の小説を書かうとしてゐる」行為に窺えるとする。

第二章では、「城のある町にて」を取り上げ、主人公峻の〈内面〉と「城のある町」の人々や風景との関わりに焦点を当てて、これまで関連性のない〈組曲風〉として捉えられてきた本作品の六篇が如何に結ばれるかを考察する。

妹に死なれた主人公峻が「都会」から姉家族の住んでいる「城のある町」に旅立つことには、「冬の蠅」の「私」と同様に〈苦悩〉のある場所からの〈脱出〉の希求であるとする。

第三章では、「ある心の風景」を取り上げ、喬の〈心〉と〈外界〉が〈同一化〉すると捉える。しかし、喬にはその風景が、ある瞬間に「全く未知の風景」のように見えるので、〈心〉と齟齬が生じる。このように、喬の〈想念〉と「深夜の町」の風景は、ある瞬間に合一し、喬に〈親和感〉を抱かせたり、また別の瞬間にその〈親和感〉が失われたりすることの繰り返しによって、喬の〈病〉による不定の〈心〉の様子が照射されているとする。

第四章では、「ある崖上の感情」を取り上げ、作中に 57 回以上登場する「窓」という言葉を中心に検討する。「窓」は生島の「無氣力な倦怠で送つてゐる」日常生活を乗り越えるための道具のようだと捉える。

一方、石田は「『もののあはれ』といふやうな氣持を超した、ある意力のある無常感」を抱くことから、石田という人物の変化が窺えるとする。主な登場人物の抱く〈心情〉は「窓」によって展開されていることが明らかに窺えるとする。

第五章では、「のんきな患者」を取り上げ、「のんきな患者」は自分の〈病〉の深刻さを意識しようとしない吉田が、その〈現実〉を冷静に受け止めるだけではなく、これまで「遠い他人」だと思っていた他の肺結核の患者の病苦及び社会の不平等さに関心を持つようになることまでを描写しているとする。そして、従来の梶井の作品では〈外部〉は〈風景〉にとどまっていたのに対し、本作品において〈外部〉は〈風景〉を超え、〈社会〉をも意味するようになっているとする。

論文審査の結果の要旨

対象とした全ての作品について、主人公の〈心〉と〈外部〉を中心に据えて、個々の作品における主人公が、病、死、「住みつく」家がないという「運命」、社会に受け入れられないこと、性の不幸といった問題などに悩まされていながら、〈脱出〉することによって〈心〉の落ち着きを追求することが描かれる構図が類似していることを指摘したことは、梶井の作品世界を作家論的なものを切り離しつつも、全体的に統一的視点を与えたことで、従来の梶井基次郎研究に新たな視界を提供したものと高く評価することが出来る。第一章の分析は、そのような視点が効果的であり、成功しているということが出来る。通説を覆すものとしての価値は十分に認められる。第二章の全編を貫くものを見出そうとする姿勢も、それまでの枠組みを破るものとして、意欲的であり、積極的に評価すべきであろう。第三章でも、複雑な構成について、独自の把握の仕方を試み、新しい問題点を提起するに至っているといえよう。

第四章の「窓」に集中した考察も、既成の達成を大きく超える、刺激的な試みと評価できる。このテーマは梶井以外のものにも広げることの可能性を感じさせるものである。第五章は、〈心〉と〈外部〉という視点で分析することそのものが、斬新なものと言えよう。

一方で、例えば第一章の、これから小説を書こうとする地点に立っているという把握には、充分な掘り下げがなく、むしろ危うさを否定しきれない。また、論の展開において、第三章以降は、すんなりと読みやすいものとはとうてい言えない。

第五章で、「のんきな患者」を取り上げたことは、一定の必然性はうかがえるものの、やはり他の作品との異質性が色濃く残ってしまうことも否めない。

また、全体的に作家論的なものに囚われないという姿勢の繰り返しての強調は、必ずしもそれ自体は新しい視点ではなく、くどきに過ぎるといわざるを得ない。

このように、様々な問題点も残しているが、今後の発展を期待させるものであり、博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと認定する。